

平安京の瓦工房

- 上ノ庄田瓦窯跡の調査 -

<http://www.kyoto-arc.or.jp>

(財)京都市埋蔵文化財研究所・京都市考古資料館



上ノ庄田の瓦工房跡

京都盆地の北部、西賀茂は平安宮の建物の屋根に葺かれる瓦が作られていた地域です。ここには、最近まで多くの瓦窯が残されており、確認されているだけでも15基にのぼり、すべてをまとめて西賀茂瓦窯跡群と呼んでいます。その最も北に上ノ庄田瓦窯跡は位置します。この瓦窯の存在は、比較的古くから知られています。昭和15年には木村捷三郎氏らによってその一部が調査され、多数の瓦と共に鳳凰を胴部にあしらう鴟尾が出土し、注目されることとなりました。

平成9年から4次に渡って区画

整理事業にともなう発掘調査が行なわれました。瓦窯は、賀茂川による河岸段丘の台地の先端に2基並んで築かれ、台地の上の平坦部には生瓦を作るための作業場が設けられています。このような窯と作業場をあわせた全体を「瓦工房」と呼んでいます。平安京の瓦工房全体が、完全に調査されたのは初めてのことです。

それでは、当時、瓦作りが行なわれた順にしたがって、この瓦工房をみていきましょう。

粘土採取 瓦作りは、粘土を採取することから始まります。地元の方の話では、方形の土壌より

30mほど西側の田の下にはきれいな白色粘土がのぞいていたということです。瓦作りにはこのような粘土を採取したのでしょう。

粘土加工 採取された粘土は、瓦に適した粘土にするために、砂などを混ぜたり寝かしたりします。方形の土壌は、このための施設と考えられます。

瓦作り 2棟の掘立柱建物の中では、瓦が作られていました。瓦作りは、屋外でも行なわれており、ロクロピットと呼んでいるのは、回転台の心棒を立てるための土壌で、ここでは丸瓦が作られていました。この周辺には、比較的



天井部を取り外した瓦窯



瓦工房の平面図(1:600)

集中して柱穴が検出されており、日差しが強いときや雨が降ったときには、柵などを利用して簡易な屋根を設けたとも考えられます。

乾燥 作られた生瓦は、窯で焼かれる前に乾燥させます。ロクロピットの北側には、150㎡程の空閑地があり、ここで乾かしたのでしょうか。また、作業場と窯の間には、窯に雨水が浸入するのを防ぐために新旧2時期の排水溝が掘られています。新しい排水溝は、作業場も囲むように掘られます。乾いた生瓦は、この溝をわたって窯に運ばれます。

窯詰め 窯は2基並び、平窯と呼ばれる瓦専用の窯です。構造は、大きく2つの部屋に分かれています。燃料(薪)を燃やす燃焼室と瓦を詰める焼成室です。瓦は、数段に積んで一度に数百枚が詰められたと考えられます。

窯焼き 平窯は、少ない燃料で短時間に瓦を焼成するための窯ですが、それでも窯焼きは長時間

に及んだと考えられます。その際、作業場となるのが、焚き口の前の楕円形に掘り窪められた前庭部と呼んでいる場所です。

取り出し 平窯は、天井部を壊して焼き上がった瓦を取り出します。この時に焼き損じの瓦を選別します。また、燃焼室にたまった灰は掻き出され、灰原に捨てられます。

以上のようにここでの瓦作りは、西から順に各工程を行なうことで瓦は完成します。工房の各施設が機能性を考えて配置されていることがわかります。

焼き上がった瓦は、消費先である平安京に運ばれます。しかし、平安京内での調査では、上ノ庄田瓦窯で作られた瓦がまとまって出土した場所はありません。その中で数点ずつですが、注目すべきものに淳和院跡や雲林院跡などの出土例があります。いずれも淳和天皇の離宮です。このことから瓦窯の操業時期は、その在位期間であ

る823～833年の前後が想定されます。しかし、檜皮葺屋根の離宮で使われる瓦は極少量ですから、このために瓦窯が設けられたとは考えられません。また、今回の調査でも多くの鴟尾片が出土しましたが、鳳凰紋の鴟尾は、東寺・西寺や宮内の主要建物にしか使われなはずですが、そのいずれからも上ノ庄田瓦窯の鴟尾の出土例は知られていません。

1～4次に渡る調査では、大量の瓦が出土し、その総数は整理箱で2000箱にのぼります。その中には、作るのに手間のかかる軒丸・軒平瓦約500点も含まれています。これらのほとんどは、不良品として、ここに捨てられたものです。

承和元年(834)に出された太政官符には「最近作られる瓦は弱くてこまる。技術指導が必要である。」という内容のものがあります。もしかすると、これは上ノ庄田の瓦工房のことを指しているのかもしれない。(南 孝雄)